

第18回 日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞

認知症の医療や介護に功績のあった個人や団体を表彰する「第18回日本認知症ケア学会・読売認知症ケア賞」の受賞者が決まった。長年の取り組みをたたえる功労賞に2人、現場での取り組みに贈られる実践ケア賞に2団体が選ばれた。受賞者の横顔や取り組みを紹介する。

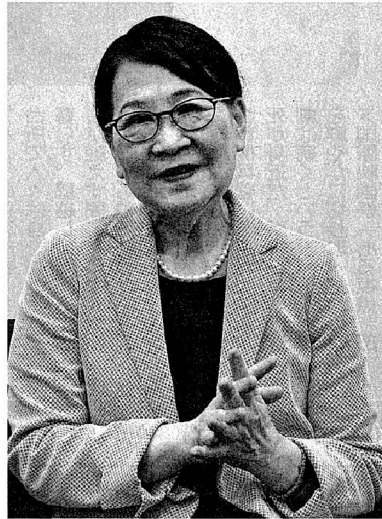
▽選考委員長＝繁田雅弘(日本認知症ケア学会理事長、東京慈恵会医科大学教授)
▽選考委員＝池田恵利子(いけた権利擁護支援ネットワーク代表)、長田久雄(桜美林大学大学院教授)、加藤伸司(東北福祉大学教授)、中村祐(香川大学教授)、堀内ふき(佐久大学長)、小林篤子(読売新聞東京本社社会保障部長)
(敬称略)

【主催】
一般社団法人日本認知症ケア学会
【特別後援】
読売新聞社

高齢者の認知症の進行予防や生きる活力につなげる「回想法・ライフレビュー」の実践と研究を約40年間続けてきた。幼い頃からの出来事や、香りや味といった五感の刺激に結びつくものをテーマにして、記憶をたどり、語り合うものだ。「その人の見ている世界を信じ、かけがえのなさを知ることがコミュニケーションだと、認知症の方たちから学ばせていただいた」と振り返る。

野村豊子さん 75

(日本福祉大学スーパービジョン研究センターリサーチフェロー)



「これまでに出会った認知症の方たちの顔が思い浮かぶ」と語る野村さん

を生き生きと語っていた。「見てごらん。海が見えるでしょう」「黒いんだよね」。まるで窓から見えているかのようにだった。そこで、日系1世の入居者のために、グループでの回想法を施設のアロケラムとして実施。日本の昔話を聞いたり、料理を食べたりしながら日本語で思い出を話してもらおうと、笑いがあふれ、和やかな場となった。「記憶を思い出すために、語り合うことは、その人の笑顔を呼び覚ます」。手応えを感じた。

帰国後は病院のソーシャルワーカーなど現場で約10年働き、その後は大学教員として後進を育成。全国で回想法・ライフレビューを実践し、研究を重ねてきた。岩手県宮古市では、ボランティアグループ「もやいの会」とともに20年近く活動し、東日本大震災後も、仮設住宅の集会場や三陸鉄道の列車内で回想法を続けてきた。

今後は各地の先進事例をまとも、認知症ケアに関わる専門職を指導し、育成を続けていくつもりだ。「ここまで長い年月だった。でも、まだ休むわけにはいかない」とほほ笑んだ。

功労賞

思い出語り活力「回想法」40年